

6. 戦前のモラエス受容における花野富蔵と佐藤春夫

— 日本の文学者におけるモラエス受容（2） —

河田 和子

1. はじめに

ヴェンセスラウ・デ・モラエス（1854年5月30日～1929年7月1日）¹は、日本研究家としてその名が挙げられてきたが、日本の文学者はどのようにモラエスを捉えていたのだろうか。日本の文学者や文化人らがモラエスに注目するようになったのは没後、特に七回忌の頃からである。モラエスの生前にも、『東京日日新聞』大正14（1925）年3月9日の朝刊に岡本良知の紹介記事「徳島に隠れ住む 文豪モラエス 日本娘の跡を慕ひ 栄職を抛つて十余年」が載り、モラエスに関心を持った者が徳島の住居を訪れたこともあったが、七回忌より前にモラエスに言及した文学者²は少ない。

日本研究家のラフカディオ・ハーンに比べ、モラエスが日本の文学者、知識人に知られることが少なかったのは、モラエスの著作がポルトガル語で書かれており、七回忌までその著作の翻訳が刊行されなかったことが関係している。日本におけるモラエス受容について見ていく際、その著作を翻訳し、雑誌や新聞にモラエスに関する紹介記事や評伝等を発表した花野富蔵の存在を見落とすことはできない。多くの日本の文学者はポルトガル語が読めないだけに、花野の翻訳やモラエス関連の著作（紹介記事、評伝など）を読むことで、モラエスの著作やその人物像について知ることになる。

昭和10（1935）年の七回忌に際し、モラエスが評価されるようになり、同年に第一書房から花野富蔵の訳で『日本精神』（原著 *Relance da Alma Japoneza*. 1926年）と『徳島の盆踊』（原著 *O "Bon-odori" em Tokushima*. 1916年）が刊行された。翻訳の他、花野はモラエスに関する紹介記事、評伝や小説類も発表していたし、戦後、花野訳でモラエスの全集が刊行される。花野は、モラエス顕彰において大きな役割を果たしており、岡村多希子「戦前におけるモラエス顕彰」（『東京外国語大学論集』平成3（1991）年3月）でも、「作品の翻訳と伝記の執筆を通じてモラエス紹介につとめたのは、少年時代にモラエスを直接知り生涯をモラエス研究にささげるようになった花野ひとりといっても過言ではない」³とする。花野は生涯を通してモラエスの周知に大きく貢献した人物であり、彼の翻訳、評伝等の著作がモラエス受容にどのような影響を与えたのかも考慮する必要がある。

そこで、モラエス研究家・翻訳家たる花野との関わりから、日本の文学者におけるモラエス受容のありようについて検討したい。花野を介してモラエスがどのように受容されたのか、そのことを見ていくにあたり注目したいのは、戦前花野と関わりのあった文学者、佐藤春夫である。佐藤が徳島市で開催されたモラエス七回忌の法要や座談会に参加する際、

花野は案内役として同行していた。本稿では、まず花野のモラエス関連の翻訳・著作について見ていき、それが佐藤のモラエスの受容にどう影響を及ぼしていたか、両者の関わりに焦点を当てた形で考察する。

2、花野富蔵の経歴、モラエスとの出会い

先に花野の経歴、年譜的事柄について整理しておきたい⁴。花野富蔵（本名は常雄）は明治33（1900）年、徳島市東船場一丁目の乾物商、小豆問屋・花野の長男として生まれた。花野家では、当主になると富蔵を名乗る慣習があり、家業は継がなかったものの常雄もその名を襲名した。大正3（1914）年、徳島中学（現・城南高等学校）に入学し、同年14歳の時にはじめてモラエスに出会っている（それに関しては後述する）。

大正7（1918）年に同中学を卒業、その後地歴研究所（所在地等は未詳）、東京外国語学校（現・東京外国語大学）スペイン語学科に入学、東京外国語学校助手となり、日本大学講師（のち教授）、天理外国語専門学校（現・天理大学）教授（昭和11（1936）年4月1日～昭和17（1942）年2月28日まで 担当科目スペイン語）⁵を歴任する。なお、花野たえ「花野富蔵 略年部と軌跡」（『モラエス』モラエス会、平成14（2002）年6月）によれば、岩波書店に勤務していた時期もあり、志賀直哉、菊池寛、大宅壮一らが東京・吉祥寺の花野宅に度々来訪していたという（富蔵の長男・学氏＝東京大学薬学部名誉教授の聞き書き



による）⁶。また、「富蔵は岩波書店の労働システムの改善に取り組み、欧米諸国のモデル等を取り入れて推進し効を奏しながらも、結果的には岩波を退社することとなった」というが⁷、岩波書店では昭和3（1928）年3月12日に従業員労働争議が起こっており、その争議に関わっていたのではないかと考えられる⁸。花野の経歴については未詳のことも少なくなく、日本大学の講師に就いた時期も不明だが、岩波書店退職後のことと推察される。

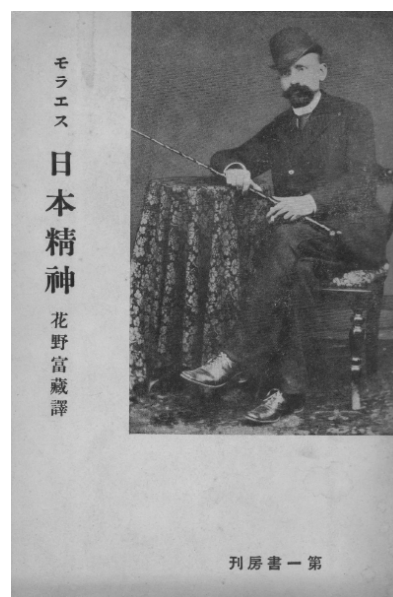
（写真：『徳島毎日新聞』昭和10（1935）年7月9日「モ翁を偲ぶ座談会(6)」より）

花野は、昭和18（1943）年に妻の生地・富山に疎開していたが、終戦後は郷里に戻り、徳島県鳴門高等学校で教鞭をとっていた（昭和26（1951）年～昭和30年（1955）年、担当科目は世界史、55歳で定年退職）。昭和37（1962）年4月から熊本商科大学（現・熊本学園大学）の教授として、没年の昭和54（1979）年まで教鞭をとった（担当 スペイン語）。在職中、モラエスに関する論文「ヴェンセスラオ・デ・モラエスの人とその作品」（『熊本短大論集』昭和38（1963）年2月）や「ヴェンセスラオ・デ・モラエスの人と作品 —十九世紀末の長崎と神戸」（『熊本短大論集』昭和38（1963）年6月）を發表し、昭和44（1969）年に『定本モラエス全集』全五巻（集英社）の完訳を刊行した。同44年3月、日本とポルトガル親善の功労者としてポルトガル政府より名誉あるインファンテ・ドン・エンリケ勲章を授与され、6月に第五回徳島新聞文化賞、さらに第六回日本翻訳文化賞も受賞した（その10年後、昭和54（1979）年8月2日、胃がんにより逝去）。

こうした経歴に見られるように、花野の専門は元々スペイン語であり、大正から昭和初期にかけての翻訳活動は、劇作家マルティネス・シエルナの戯曲の翻訳『揺籃の歌』(海外文学新選 第37編、新潮社、大正15(1926)年7月)をはじめ、スペイン文学を中心に行われていた⁹。花野が最初にモラエスの翻訳書を刊行したのは昭和10(1935)年6月、第一書房から『日本精神』、その三ヶ月後に同出版社から『徳島の盆踊』を出版し、その後も『日本夜話』や『おヨネと小春』、『極東遊記』、『日本歴史』等のモラエスの翻訳書を出すとともに、スペインの哲学者で詩人、劇作家でもあるミゲル・デ・ウナムノ(1864年9月29日～1936年12月31日)の著作、『苦悶の哲学 西洋精神の苦悶』(第一書房、昭和12(1937)年5月)や『随想録』(第一書房、昭和16(1941)年2月)等の翻訳も行っていた。

モラエスの翻訳書を刊行したのは七回忌が契機となっているが、そもそも花野がラフカディオ・ハーンに比肩する日本研究家として関心を抱いたのは、少年時代にモラエスに会ったことが関係する。ポルトガル語も伊賀町に住むモラエスに学んだとされる¹⁰。『日本精神』(前出)の「あとがき モラエスの生涯」には、14歳の時にモラエスに初めて会った時の印象が、次のように回想されている。

わたしが初めて接したのは、十四の秋で、当時徳島中学の一年生であつた。今から数えてみると、モラエスはそのとき六十歳で、徳島に移住した翌年だつたわけである。若々しくて、元気で、殊にその大きな瞳は老いの翳すら宿してゐなかつた。りつぱな髭が、口を被はんばかりに茂つて、鬚鬚は胸のあたりまで垂れてゐた。それが灰色混りの紅毛だつたので、老人であることを物語つてゐたが、あれさへ剃つてゐれば、額の皺がいくら深くても六十歳とはどうしても見られなかつたらう。外出のときはいつも中折を右傾けにちよこんと戴つけ、ベンガラのステッキをついてゐた。背丈は六尺に近く、胴が長くて四肢が割合に短いので、欧米人の体格といふよりも、日本人のそれに近いものだつた¹¹。(傍線は引用者による。以下同様)



富蔵(常雄)が徳島中学に入学したのは大正3(1914)年、この年にモラエスに初めて会ったのだが、斉藤小春と同棲していた時期であり、当時のモラエスに若々しさがあつたのはそのことも関係しよう。20年前の回想にしてはモラエスの風貌などかなり細かい所まで記されている。14歳当時=少年時の記憶、印象というより、執筆時(昭和10年時)のモラエスに対する認識や印象(『日本精神』の表紙に掲載された写真などモラエス関連の資料に基づくモラエス観)によって後付けされた部分があるだろう。特に欧米人よりも日本人に

近い体格として捉えているのは少年時の印象とは考えにくいし、〈日本人〉に引きつけて解するこの時期の花野の視点を反映している。

翻訳書は昭和 10 (1935) 年からだが、花野がモラエス関連の紹介記事や、評伝的な文章を雑誌や新聞等に発表するようになったのは昭和 9 (1934) 年からと見られる。今回、花野のモラエスに関わる著作(翻訳、紹介文、評伝、小説、学術論文等)を調査し、本稿の最後に【参考】花野富蔵のモラエス関連の著作リスト(『定本モラエス全集』刊行まで)を付している。最も早い時期のものとして「紅毛のニツポン人モライス」(『文芸』昭和 9 (1934) 年 5 月)があり、「現代葡萄牙が持つ最高級の文豪」で「小泉八雲と芸術的価値を争ふべき」偉大な存在でありながら、「故国と国語との宿命に遮られて、日本人に理解されないでゐる」¹²モラエスの生涯と著作を紹介している。その後に発表した「モラエスの著述——紅毛日本人のシルエット」(『伝記』昭和 9 (1934) 年 12 月)には、花野がモラエスと出会った時の回想も記されている。『日本精神』のあとがきに書かれた先の引用とも符合するが、同記事では、モラエスが愛した日本ムスメ(オヨネと小春)について触れながら、異国人を毛嫌いする日本人もあり、モラエスは「いつも、自分の紅毛が日本人になりきらうとする努力をぶつ壊すのを終生悲しんだ」異邦人ゆえの悲哀を記していた¹³。

〈日本的なもの〉の議論が高まっていた時期でもあり¹⁴、花野によるモラエスの翻訳本が出版されたことに触発されて、モラエスに関心を持つ文学者も出てくる。佐藤春夫もその一人であり、モラエス七回忌の追悼法要や座談会に参加する際、花野がその案内役として同行した。徳島で行われた 7 月 1 日の法要については、その目的やモラエス顕彰に与えた影響など、佐藤征弥「モラエス七回忌法要の背景 — 顕彰、観光への期待、『日本精神』刊行の意味するもの —」(『令和 2 年度総合科学部創生研究プロジェクト経費・地域創生総合科学推進経費報告書 異文化に照らし出された四国～グローバルな視点からの地域文化に関する文献調査から～』徳島大学総合科学部、令和 3 (2021) 年 3 月)で論じられているので、詳細はそちらを参照されたい(座談会については後述する)。

管見では、翻訳者・モラエス研究者として花野について述べている文学者はあまり多くないが¹⁵、佐藤はエッセイの中で花野に言及している。『日本精神』や『徳島の盆踊』を読んでおり、花野に感化を受けた所もあるが、モラエスの捉え方については花野との相違がある。その点も留意しながら佐藤におけるモラエス受容と花野との関わりを見ていく。

3、七回忌における佐藤春夫と花野との関わり

そこで佐藤についても、昭和 10 (1935) 年前後までの経歴と文学的動向を簡単にまとめおく。佐藤春夫は、明治 25 (1882) 年 4 月 9 日、和歌山県東牟婁郡新宮町(現・新宮市)に生まれ、大正期から昭和期にかけて詩人、小説家、また評論家としても活躍し、文壇において重きをなした文学者である(昭和 39 (1964) 年 5 月 6 日没)¹⁶。中学卒業後、上京して批評家の生田長江に師事し、また与謝野鉄幹夫妻の東京新詩社に入り生涯の友となる堀口大学を知る。慶應義塾大学予科に入学するが、大正 2 (1918) 年に慶應義塾大学を中退。

雑誌『三田文学』『スバル』などに詩歌を発表し、『田園の憂鬱』（新潮社、大正 8（1919）年 6 月）、『都会の憂鬱』（新潮社、大正 12（1923）年 1 月）などの小説を次々に発表して、芥川龍之介とともに文壇を担う新進作家として注目された。文芸評論や随筆、童話も発表



するとともに、アナトール・フランスの『人間悲劇』などフランス文学の翻訳、『聊齋志異』など中国古典の翻訳・翻案も行い、その文学活動は多岐にわたる。昭和 10 年、『日本浪漫派』（昭和 10（1935）年 3 月創刊）の同人となり、「日本文学の伝統を思ふ」（『中央公論』昭和 12（1937）年 1 月）等を発表。佐藤は早くからラフカディオ・ハーンの文学的影響を受けていたのだが、モラエスに関心を持つのは昭和 10 年代、日本の伝統的な文学、古典を顧みるようになる時期と重なっている。

（写真：昭和 10 年頃 関口の自宅庭にて『定本 佐藤春夫全集』第 35 巻、臨川書店、平成 13（2001）年 4 月）

佐藤は、岡本良知の『東京日日新聞』に掲載されたモラエス紹介記事（前出）を読んでおり、モラエスの名は知っていたが、ポルトガル語が読めないだけに花野の翻訳が出るまでその著作を読むことはなかった。彼がモラエスに関心を持つ直接のきっかけは、昭和 10（1935）年 7 月 1 日、徳島で行われたモラエス七回忌追悼法要とその前日の 30 日夜、徳島毎日新聞社主催の座談会「モ翁を偲ぶ座談会」¹⁷に参加したことにある。徳島出身のモラエス研究者ということで花野が同行し、6 月 27 日の朝、連絡船・鳴門丸で徳島に来県し、午後からモラエスの旧居と潮音寺の墓所を訪れている¹⁸。後日、徳島県立光慶図書館でモラエスの遺品展示も見ており、佐藤はこれらの見聞やモラエスに関する事柄¹⁹を記す形で「徳島見聞記」（原題「徳島見聞記 モラエス埋骨の地（一）～（五）」、『東京朝日新聞』昭和 10（1935）年 7 月 1 日～5 日、随筆集『散人偶記』第一書房、昭和 11（1936）年 6 月 収録）を発表し、『徳島毎日新聞』（昭和 10（1935）年 7 月 1 日）に「モラエスの未刊詩」も寄稿した²⁰。

佐藤が法要に参加したのは文芸懇話会²¹を代表する形だったが、参加後、同会を脱退している。その理由は「文芸懇話会に就て＝広津和郎君に寄す＝」（『東京日日新聞』昭和 10（1935）年 9 月 5 日～8 日）に書かれているが、「日本主義者としてのモラエスを発見するの一方ならず苦心し」、「日本精神の体得者としてのモラエスを見てこれを宣伝する事をいつの間やら押しつけられてしまつてゐる」ことで「文芸懇話会を幾分か呪はしい存在と思ふようになった」からだった²²。佐藤は「徳島見聞記」で、「亡き愛人と新しい愛人とを愛するの余り彼女等の故郷の山水の秀麗な靈に接し、更に徹底して彼女等を生んだ民族のすべてを敬愛した」「情痴の詩人」とモラエスを評したが、その一方で、「日本文明の紹介者、日本精神を体得した外国人といふ観点からの発見によつて一躍全国的な祭礼の趣のある法要」だったことも記していた²³。

そもそも、佐藤は翻訳において外国人としての異質な部分も残すべきとする立場を取っていただけに、〈日本精神の体得者〉とするモラエスの一面的な捉え方に違和感があつたのだろう。そうした佐藤の考え方は、法要前日「モ翁を偲ぶ座談会」の発言からもうかがえ

る。この座談会の様子は『徳島毎日新聞』朝刊に七回にわたって掲載され、その六回目（『徳島毎日新聞』昭和10（1935）年7月9日）に、花野と佐藤の談話が載っている。両者の発言から翻訳の仕方に対する考え方の相違も見て取れるのだが、徳島毎日新聞社の井上主筆からモラエスの著作の感想を聞かれた際、佐藤は次のように語っている。

これは我国の『徒然草』の様なものではないかと思ひます。『徒然草』の価値は作者の連想が形を生んでよくそれを調和し凡ゆる方面に細部のつながりを有してゐる点であつてモラエス先生の作もよく是に似てゐるように思ひます。（略）花野君に忠告したのは余りうまく修飾すると現在書いた様になつて了ふ、少しは外国人の書いた様に生々しい処がなければならぬから少しはまずい処も残して置いた方がよい、余り日本的では日本人が書いたものになつて了ふと忠告しておいたのでありますがモラエスさんの文芸は日本的なものであらうと考えるのであります。（『徳島毎日新聞』「モ翁を偲ぶ座談会（6）」前出）

花野訳『徳島の盆踊』はまだ刊行されてない時だが、佐藤がモラエスの著作を「『徒然草』の様なもの」と言ったのは、花野が「モラエスの著述——紅毛日本人のシルエット」（前出）で、『徳島の盆踊』は「随筆感想を集めた『徒然草』みたいなもの」²⁴と書いていたことによるのだろう。この佐藤の発言前、花野は井上主筆から『日本精神』を訳した時の感想を聞かれ、次のように述べていた。

翻訳して感じました事はモラエス氏の文章が非常に平易で誰にでも判かる文章だと云ふ印象であります。（略）日本のでも亦然うでありまして平易な中にも非常な深みがある其の味はひ・匂ひと云ふものを持たせる為に上手に訳するモラエスの文章は日本文ではないかと思はれるやうな事になり此事は佐藤さんから教へられて始めて知つた次第であります。（略）非常に文芸的のものはかなりの用意をして、かゝらないと非常に文章が平易だと言ふて、その儘訳するとそれだけ含みと云ふものが失はれるのではないかと思ふのであります。（『徳島毎日新聞』「モ翁を偲ぶ座談会（6）」前出）

平易な文章にも深みや味わいがあることを佐藤から教えてもらったというが、花野は、モラエスのポルトガル語の文章もその点で日本文に近いと認識していた。しかし、平易な文章を直訳すると含みも味わいもなくなるため、「かなりの用意」、即ち含みのある日本文に近くなるよう翻訳に工夫（修飾）も必要になると考えていた。佐藤は、そうした花野に対し、「余り日本的では日本人が書いたものになつて了ふ」と難じて、外国人の書いた「生々しい処」「まずい処」も残しておく方がよいと忠告していたのである。

ここからも花野と佐藤のモラエス受容における相違が見て取れるが、花野はモラエスの文章を翻訳するのに日本人の感覚に近づけ（そのため修飾もほどこす）、日本的な面を強

調する形でモラエスを評価しようとした。しかし、佐藤は『徒然草』との類似点など「日本的なもの」がある点を認めながら、それとは異質な点も無視すべきではないと考えていた。外国人の文章として日本との差異もある点に佐藤は注目していたのだが、そうした差異を捨象することは〈日本精神の体得者〉としてモラエスを強調することにも繋がる。そのことに違和感を抱いていたから、佐藤は「余り日本的では日本人が書いたものになつて了ふ」と花野に忠告したのだと考えられる。翻訳の問題にとどまらず、文芸懇話会や七回忌法要の主催者側に見られる日本主義的な思惑に花野も利用されやすい所があり、佐藤はそのことを危惧していたのではないか。

佐藤は「モラエスの未刊詩」（前出）でも、「日本主義者モラエスの発見に急の余り彼の第一の美点たる大詩人モラエスを忘れるに忍びない」²⁵と書いていた。モラエスを〈詩人〉として評価し、イデオロギーを反映した捉え方に疑念を持っていたことはこの言説からもうかがえるが、そもそもモラエスを偉大な詩人として紹介したのは花野だったことに留意したい。花野は「日本文化への貢献者 モラエス七回忌」（『読売新聞』朝刊、昭和10（1935）年6月30日）で、「最初に惹きつけられたのは、むろん文学者の立場から、その詩的才能にあつた」と述べていたし、『日本精神』の「あとがき モラエスの生涯」でも、次のように本国で偉大な詩人として評価されていることを紹介していた。

面白いといへば、やはり同紙（引用者注、リスボンの「夕刊新聞」）上にソネットの類を載せてみたが、その方のペン・ネームを「無政府主義詩人」としてゐることである。なぜ、かうしたペンネームを使用したのかといふのに、その詩がまるで爆弾を抱いた無政府主義者みたいに激しい情熱を帯びてゐるからだといふのである。（略）これらの詩は一冊の本にまとめられてゐない。それ以前の二八八〇年代の詩集も、やはり未刊行である。わたしは是非一冊にまとめて世に送りたいと思つてゐる。（略）一八九五年、（略）題して「極東めぐり」といひ、ヴェンセスラオ・デ・モラエスの本名がそのとき始めて公けにされたのだつた。この著作の評判はなかなか大したもの、葡萄牙が持つた世界的文豪フィアリオ・ダルメイダはモラエスを偉大なる詩人と評して、「故郷の銀河を離れた巨星の燦たる光輝である。」と絶讃したのだつた²⁶。

こうした花野の言説に触発されて、佐藤も「モラエスの未刊詩」で「無政府的詩人との名で詩を発表して其の精神の大胆な詩風が編集者を驚かせ作者の何人であるかを問題にせられた事があると聞く」²⁷と書いている。さらにモラエスの詩を掲載した現地の新聞が遺品として保管されていることを知った佐藤は「本国の出版者に送つてやつたらさだめし喜ぶ事と思ふ」、「適当者が現れて此れ等の事も果して呉れると好い」²⁸という要望まで記している。それはモラエス研究家・花野に向けた要望にほかならず、エールでもあつただろう。「日本主義者モラエスの発見に急の余り彼の第一の美点たる大詩人モラエスを忘れるに忍びない」と書いたのも、詩人として惹かれたという花野への忠告が込められていたに違い

ない。花野の翻訳、モラエス関連の著作に感化を受けた佐藤だからこそ、このような忠告をしていたのである。

4、花野訳『徳島の盆踊』に対する佐藤のコメント

佐藤におけるモラエスの受容のありようは、「日本文学雑観（そぞろごとを記して『徳島の盆踊』の訳者に寄す）」（『時事新報』昭和10（1935）年9月30日～10月2日、『散人偶記』前出 収録）からもうかがえる。このエッセイは花野訳『徳島の盆踊』の読後感を記したものであり、花野のモラエス観との共通点、相違点もうかがえる。そこで、「日本文学雑観」において佐藤が花野にどのようなコメントをしていたかを見ていく。

佐藤は七回忌の法要参加の後、花野から『徳島の盆踊』を恵贈されて、その読後感を「日本文学雑観」に書いたのだが、「モラエスの日本精神なるものは少々腑に落ち兼ねるもの」²⁹と述べていた。『日本精神』はあまり評価していなかったが、『徳島の盆踊』に対して好意的にコメントしており、「紅毛日本人」とする花野の捉え方についても佐藤は次のように賛意を示していた。



さすがはモラエスも優秀な詩人だけに、その専門の方面からは日本をよく知り、日本をよく見てみますね。文学上の手法なり神経なり感情なりを見ると彼はなるほど紅毛日本人であつたと思はれる節が多い。日本文学の特長を追憶にあるとし、心理主義の文学と見た彼はその模造を企てるに当つても一切の計画のやうなものを不必要として随筆随感の体を採つてそぞろごとそこはかとしもなく記しつづけて亡妻の追憶に耽る世外の老人の心理をそれにふさはしい仄暗い陰影の世界の明暗のやうなとりとめのないおぼつかなさのなかに置いた。（略）

亡き情人を追憶し異境の日常の見聞を記しつづけて孤独を自ら慰めようと思ひ立つた時に日本文学の伝統的手法を採用したのはさすがに道に老いた者の企てでした³⁰。

佐藤はモラエスを詩人として評価したが、この〈詩人〉は詩的な感受性を持つ者としての意味合いが強い。『徳島の盆踊』に興味を持ったのは、モラエスが『枕草子』『方丈記』『徒然草』等の随筆に日本の伝統的手法を見、心理主義の文学として日本文学の特質を捉えて、モラエス自身そうした随筆の形式を採って亡妻（おヨネ）を追憶し、異境の見聞を記して自らの孤独を慰めようとした点にある。そうした点から佐藤は「紅毛日本文学の試作が日本文学として成功したものと思へる」（「日本文学雑観」）³¹と『徳島の盆踊』を評価したのだが、それは花野が同書の「あとがき」で次のように述べたことに基づいている。

モラエスは日本文学の特徴をこの「お喋り」にありとした。個人が見、聞き、感じたことをそこはかとなく書きつらねて往くのが日本文学の本質だと断じた。だから、日本文学は心理主義の文学であり、「私」の文学でもあると喝破した。自分の「追慕」を綿々と物語るに最も適合した文学的形式は日本文学の本質なる日記、手紙、草紙の類を措いて他にないと考へた。(略)

これを要するに、モラエスはこの「徳島の盆踊」を契機として、「追慕」の世界へ没入して往つた。謂はば、この作品はその没入のパスポートであつた。それと同時に、それは新しい日本文学の一つの見本であり、紅毛日本文学の一つの試作でもあつた³²。

花野が「紅毛日本文学の一つの試作」と評したのは、個人の見聞、感想などを書きつらねる所に心理主義の日本文学の本質があると見たモラエスが、その伝統的な日本文学の方法に則って『徳島の盆踊』を書いたことで、「新しい日本文学」の一見本になると考えたからである。佐藤もこうした花野の見方に同意して「なるほど紅毛日本人であつたと思はれる節が多い」と述べ、「紅毛日本文学」という言い方にも賛意を表していた。

だが、『徳島の盆踊』に引用された日本の随筆が原文からの借用だったことに対し、佐藤は「モラエスの筆を通つて来て幾分紅毛化してしまつた『土佐日記』や『枕の草紙』を読みたかつた」³³とコメントしていた。また「古典には乏しい描写の詳細や考察の分析的なものなど」が見られ、「序論から結論まで草体ながらも順序よく立てたやうな結果を示してゐる」点で「紅毛と日本との相違」があると佐藤は認識していた³⁴。「日本文学雑観」において「面白いのは類似の面よりも寧ろ相違の面」だと述べたのは、「現代日本の紅毛文学」＝西洋文学の影響を受けた日本の近代文学も、本場の文学とは異質なものになっており、その点でモラエスの「紅毛日本文学」とも通じる所があるからだった³⁵。つまり、佐藤はモラエスの著作に見られる日本的な面と異質な面の二面性に着目しており、その点で日本との類似点に力点を置こうとした花野の立場とは異なっている。そもそも〈紅毛日本人〉という言葉は花野がモラエスにつけた綽名だが、紅毛の外国人でありながら日本人になろうとしたモラエスを強調する意味合いが強い。花野は「日本文化への貢献者 モラエス七回忌」（『読売新聞』前出）でも、「日本人そのままの生活を送つた」が「日本人はあくまでも毛唐人としての認識を改めようとしなかつた」のであり、「そのモラエスの気持を、わたしは「紅毛の日本人」と綽名」と記している。

佐藤の作品において、モラエスに言及したものは前述したもの（「徳島見聞記」「モラエスの未刊詩」「文芸懇話会に就て」「日本文学雑観」）の他、一部分の言及に留まるが、『熊野路』（小山書店、昭和11（1936）年4月）や「山水おぼえ帳」（『文芸春秋』昭和11（1936）年8月）³⁶、「兼好と長明と」（原題「兼好法師と鴨長明——或はつれづれ草と方丈記と」、『改造』昭和12（1937）年4月）がある。特に「兼好と長明と」で、「心理主義の詩人であつたモラエスが日本文学を心理主義の文学と断じ去つた時、彼が疑うべくもなく一読

していた「つれづれ草」をその念頭に先ず浮べていなかったであらうか。」³⁷という所など『徒然草』を心理主義の文学として説くために、モラエスを引き合いに出している。これも前述したように、花野が『徳島の盆踊』を随筆や感想を集めた『徒然草』のようなものと述べていたことに由来しようが、この時期、佐藤自身、吉田兼好と鴨長明の随筆を現代語訳している（『現代語訳国文学全集 第十九巻 徒然草・方丈記』昭和12（1937）年4月、非凡閣、「兼好と長明と」を解説として収録）。隠者文学の『徒然草』、『方丈記』への関心を深めていくのは、日本の伝統的な文学を顧みる一つのきっかけとして、モラエスの影響、その解説者たる花野の感化もあったと見られる。

しかし、佐藤の作品において昭和12（1937）年後半以降、また戦後においてもモラエスや花野について言及したものは見当たらない。それは何故か。モラエスの著作や花野のモラエスに関する紹介記事を読んだことが、『方丈記』『徒然草』等の随筆にみられる心理主義的特徴や伝統の問題に関心を寄せることに繋がっていたのだが、佐藤はモラエスの著作の日本的な側面とともに異質な面（西洋的な分析的発想、構成など）も認識していた。文学の上で、そうしたモラエスの二面性、異邦人としての差異も意識しただけに、佐藤の関心が日本の伝統的な文学、古典の方に傾斜していくにつれ、モラエスへの興味は薄れたのではないかと考える。

5、おわりに 戦中から戦後にかけて

本稿では、日本の文学者におけるモラエスの受容について検討するにあたり、特に花野富蔵と佐藤春夫との関わりに着目し、佐藤が花野に感化を受けた点やモラエスの捉え方の相違について考察してきた。佐藤はモラエスを詩人として評価し、『徳島の盆踊』などの著作の影響もあって日本の伝統的な文学を顧みるようになるが、それは花野の翻訳・解説による所も大きい。モラエスに対する捉え方の相違として、花野はモラエスが異邦人（「紅毛人」）でありながら、日本の生活や亡妻を偲ぶ（追慕）の世界に没入して日本人になろうとした面を強調したのに対し、佐藤の方は、モラエスの著作に日本的な面とそれとは異質な面が見られるその二面性に注目していた。佐藤の作品で、「兼好と長明と」以降モラエスに言及したものはなく、モラエスへの関心は一時的なものだったのだが、それは日中戦争を契機に戦争協力的な思想が強化され（昭和12（1937）年9月より行われた国民精神総動員運動など）、〈日本精神〉宣揚にモラエスが利用されていくことも関係していると思われる。佐藤は〈日本精神の体得者〉としてモラエスを顕彰することに疑念を抱いていた。

一方、花野は、戦時期もモラエスの翻訳書を次々と刊行し、モラエス関連の著作、紹介記事や評伝等も発表するが、岡村多希子「戦前におけるモラエス顕彰」（前出）が指摘するように、『日本人モラエス』（青年書房、昭和15（1940）年11月）で「神国日本を賛美し日本人以上の日本精神を体得したというモラエス像」を強く打ち出すようになる³⁸。「紅毛日本人」という言葉が用いられることも少なくなり、代わりに「日本人モラエス」という言葉を多用するようになるが、そこに花野のモラエス観、紹介の仕方の変化も表れている。『日

本人モラエス』(前出)では、「紅毛日本人」という言葉で捉えていた側面、モラエスが異邦人ゆえに抱えていた孤独や寂寥、煩悶よりも、モラエスの生活が「日本人以上の日本的な生活に終始してゐた」ことが力説されている³⁹。太平洋戦争前夜の時局に呼応した形で、モラエスが明治天皇を崇敬していた点が強調され、「日本生活に没入して「日本精神」の醍醐を味到し」、「著書を通じて万邦無比であるわが国体の精華を海外に宣揚した恩人」⁴⁰として「日本人モラエス」の功績を意義づけようとした。花野自身、モラエスの功績を自分達日本人に周知させたいという思いが強かっただけに、時局に合わせた書き方になってしまった所がある。

徳島出身の小説家・佃実夫は、『わがモラエス伝』(河出書房、昭和41(1966)年10月)の中で敗戦後の占領期、花野が次のように語っていたことを記している。

「それ(引用者注、「日本の国粹主義の賛美者」である面)を強調せざるをえなかったのは、やはり時代のせいなんです。(略)私だけが、彼を歪めて伝えたわけではありませぬけれど、一斑の責任はあるんですから……。とくに翻訳については、自分の手でぜひ訂正しておきたいと念願しているわけです。(略)とりわけ皇室やイデオロギーのことで、翻訳から抜かしたり、伏字をよぎなくされた部分もありましてね……」⁴¹

検閲など言論統制があったとはいえ、モラエスを国粹主義の賛美者として強調したことに花野自身自責の念もあった。それ故、戦後はそのイメージを修正すべく、翻訳やモラエス関連の著作を発表していったのではないか。

翻訳について自分の手で訂正しておきたいという念願は、『定本モラエス全集』を刊行することによって実現したのだろうし、花野の翻訳やモラエス関連の著作は戦後の文学者の作品にも影響を与えたと思われる。特に佃実夫『わがモラエス伝』は、花野のモラエス関連の翻訳、著作に依拠して書かれている所も多く、志賀直哉も戦後に発表した小説の中でモラエスとともに花野のことにも触れている。戦前出版された翻訳とモラエス全集との違い、戦後における文学者のモラエス受容と花野との関わりなど、本稿では検討するに至らなかったが、それは今後の課題としたい。

【参考】花野富蔵のモラエス関連の著作リスト（『定本モラエス全集』刊行まで）

*花野富蔵のモラエスに関する著作（翻訳、雑誌・新聞等に発表したモラエス紹介記事、評伝、小説、学術論文など）について、昭和9年から昭和44年に『定本モラエス全集』が刊行されるまでの時期のものをリストアップした（その後も翻訳書が出版されているが、既に発表された翻訳の再録、抄録であるので全集刊行までとした）。『徳島毎日新聞』等に発表された花野の翻訳、紹介記事は内容と発表年月日まで確認できたものに限っている⁴²。なお、翻訳書は他の著作と区別が付きやすいよう、☆印をつけてゴシック体で表記した。

昭和9年〈1934〉

- ・花野富蔵「紅毛のニツポン人モライス」（『文芸』2(5) 改造社、昭和9・5）
- ・花野富蔵「モラエスの著述—紅毛日本人のシルエツト」（『伝記』1(3) 伝記学会、昭和9・12）

昭和10年〈1935〉

- ☆モラエス 著／花野富蔵 訳『日本精神』（第一書房、昭和10・6）
- ・花野富蔵「日本文化への貢献者 モラエス七回忌」（『読売新聞』昭和10・6・30）
- ・花野富蔵「モラエスと悟り」（『徳島毎日新聞』昭和10・7・1）
- ☆モラエス 著／花野富蔵 訳『徳島の盆踊』（第一書房、昭和10・9）
- ・花野富蔵（談話）「モ翁を偲ぶ座談会(6)」（『徳島毎日新聞』昭和10・7・9）
※同紙面に佐藤春夫の談話も掲載
- ・花野富蔵「モラエス素描 七年祭を迎へて」（『伝記』2(7) 伝記学会、昭和10・7）
- ・花野富蔵「モラエスと日本精神」（『セルパン = Le serpent』(53)、昭和10・7）
- ・花野富蔵「徳島日記 モラエス」（『セルパン = Le serpent』(55)、昭和10・9）

昭和11年〈1936〉

- ☆モラエス 著／花野富蔵 訳『日本夜話』（第一書房、昭和11・2）
- ・花野富蔵「モラエスの佛教観」（『真理』2(4) 真理社、昭和11・4）
- ☆モラエス 著／花野富蔵 訳『おヨネと小春』（昭森社、昭和11・6）
- ・花野富蔵「第二の小泉八雲 モラエスの徳島」（『旅』13(9) 日本旅行倶楽部、昭和11・9）

昭和12年〈1937〉

- ☆モラエス 著／花野富蔵 訳『極東遊記』（中央公論社、昭和12・4）
- ・花野富蔵「或日のモラエス」（花野富蔵『日本人モラエス』モラエス友の会、昭和12・10）
*小説

昭和14年〈1939〉

- ・花野富蔵「モラエスとヘルン」（『日本文化時報』(54) 日本文化協会出版部、昭和14・5）
- ・花野富蔵「日本人モラエス」（『日本文化』(41) 日本文化協会、昭和14・7）

昭和 15 年 〈1940〉

・花野富蔵『日本人モラエス』（青年書房、昭和 15・11）

＊『日本文化』掲載の「日本人モラエス」とは内容の構成、分量も異なる。

昭和 16 年 〈1941〉

・花野富蔵『モラエスの日本精神』（ラジオ新書 69 日本放送出版協会、昭和 16・12）

昭和 17 年 〈1942〉

☆モラエス 著／花野富蔵 訳『日本歴史 附 日本に於けるメンデス・ピント』（明治書房、昭和 17・2）

☆モラエス 著／花野富蔵 訳『大日本 歴史・芸術・茶道』（帝国教育会出版部、昭和 17・5）

☆花野富蔵訳「ヴェンセスラオ・デ・モラエス」（田部隆次編『日本を観る』青山出版社、昭和 17・7）

（戦後）

昭和 29 年 〈1954〉

☆モラエス 著／花野富蔵 訳『日本精神』河出新書 41（河出書房、昭和 29・5）

・花野富蔵「モラエスさん ある警察官との挿話 1～14」（『徳島新聞』夕刊、昭和 29・6・25～7・5） ＊小説

昭和 30 年 〈1955〉

・花野富蔵「モラエスさん ある尼僧との挿話①～⑩」（『徳島新聞』夕刊、昭和 30・6・24～7・8） ＊智賢尼との交流を描いたもの（「あくまで小説」と付記）

昭和 33 年 〈1958〉

・花野富蔵『日本人モラエス—阿波の辺土に死去して三十年—』（『週刊朝日』別冊、朝日新聞社、昭和 33・7） ※「筆者は徳島在住、モラエスの伝記作家」という付記あり

昭和 38 年 〈1963〉

・花野富蔵「ヴェンセスラオ・デ・モラエスの人とその作品」（『熊本短大論集』（25）別冊 熊本短期大学、昭和 38・2） ※全集の翻訳に言及

・花野富蔵「ヴェンセスラオ・デ・モラエスの人と作品—十九世紀末の長崎と神戸」（『熊本短大論集』（26）別冊 熊本短期大学、昭和 38・6）

昭和 44 年 〈1969〉

☆花野富蔵 訳『定本モラエス全集Ⅰ』（集英社、昭和 44・3）※「解説」は井上靖

☆花野富蔵 訳『定本モラエス全集Ⅳ』（集英社、昭和 44・4）※「解説」は鶴見俊輔

☆花野富蔵 訳『定本モラエス全集Ⅱ』（集英社、昭和 44・5）※「解説」は遠藤周作

☆花野富蔵 訳『定本モラエス全集Ⅲ』（集英社、昭和 44・6）

※「解説」はアルマンド・マルティンス・ジャネイラ（駐日ボルトガル大使）

☆花野富蔵 訳『定本モラエス全集Ⅴ』（集英社、昭和 44・7）

※「解説」は佃実夫／花野富蔵「モラエス小伝」収録

-
- ¹ モラエスは、海軍士官から外交官に転身して明治 32 (1899) 年神戸大阪ポルトガル領事の任を受け神戸に移住した。芸妓・福本ヨネと結婚したが先立たれ、愛妻の郷里・徳島に造った墓を見に行ったことがきっかけで日本永住を決めて領事の職を辞し、大正 2 (1913) 年に徳島に隠棲した。ポルトガル領事の職に就く前から『極東遊記』(Traços de Extremo Oriente. 1895 年)、『大日本』(Dai-Nippon. 1897 年) などアジア、日本に関する著作を發表し、日本移住後も文筆活動は続けられた。
- ² その一人として小説家・貴司山治がおり、大正 14 (1925) 年にモラエス宅を訪問し、当時の体験をもとに「文豪モラエス」を書いた。その点に関しては拙論「貴司山治におけるモラエスの影響—日本の文学者におけるモラエス受容—」(『令和 2 年度総合科学部創生研究プロジェクト経費・地域創生総合科学推進経費報告書 異文化に照らし出された四国〜グローバルな視点からの地域文化に関する文献調査から〜』令和 3 (2021) 年 3 月、徳島大学総合科学部) で論じた。同論に日本の文学者における〈モラエスもの〉一覧(戦前)も付している。
- ³ 岡村多希子「戦前におけるモラエス顕彰」『東京外国語大学論集』第 42 号、前出、196 頁〜197 頁。
- ⁴ 花野富蔵の経歴に関しては、佐光昭二『阿波洋学史の研究』(徳島県教育印刷、平成 19 (2007) 年 4 月) や花野たえ「花野富蔵 略年譜と軌跡」(『モラエス』第 5 号、モラエス会、平成 14 (2002) 年 6 月)、深沢暁『新モラエス案内 もうひとりのラフカディオ・ハーン』(アルファベータブックス、平成 27 (2015) 年 11 月) 等を参照。
- ⁵ 佐光『阿波洋学史の研究』前出、787 頁。
- ⁶ 花野たえ「花野富蔵 略年譜と軌跡」前出、17 頁。
- ⁷ 花野たえ「花野富蔵 略年譜と軌跡」前出、17 頁。
- ⁸ 岩波書店編『岩波書店八十年』(岩波書店、平成 8 (1996) 年 12 月) によれば、昭和 3 (1928) 年 3 月 12 日に従業員労働争議があり、店員約 60 人および小売員 10 数人は、労働条件の改善等について嘆願書を店主に出した(49 頁)。深沢暁『新モラエス案内 もうひとりのラフカディオ・ハーン』(前出) でも、花野は「一九二八年に起こった労働条件改善の労働争議に加わり、その年の末までに岩波を退社」したとしている(166 頁)。
- ⁹ スペインの文学者、哲学者に関する花野の翻訳については、佐光『阿波洋学史の研究』(前出) を参照。同書に花野が翻訳した作家、作品名も列挙されている。784〜787 頁。
- ¹⁰ 佐光『阿波洋学史の研究』(前出) では、花野富蔵の長男・学氏(平成 29 (2017) 年没) によれば「父のポルトガル語はモラエスに学んだと聞いて」おり、「モラエス宅へ通い、ポルトガル語の指導を熱心に受けていたのであろう。」とする(783 頁)。
- ¹¹ 花野訳『モラエス 日本精神』(第一書房、昭和 10 (1935) 年 6 月)、303 頁〜304 頁。
- ¹² 花野「紅毛のニツポン人モライス」(『芸芸』昭和 9 (1934) 年 5 月)、182 頁〜183 頁。
- ¹³ 花野「モラエスの著述」(『伝記』昭和 9 (1934) 年 12 月)、86 頁。
- ¹⁴ 拙論「昭和一〇年代における〈日本的なもの〉—横光利一の「厨房日記」から—」(『九大日文』第 12 号、平成 20 (2008) 年 10 月) において、横光の小説「厨房日記」(『改造』昭和 12 (1937) 年 1 月) が書かれた背景として〈日本的なもの〉の議論が高まっていたことに着目し、同時代の知識人、文学者の言説をもとに昭和 10 年代の〈日本的なもの〉の問題機制について考察した。
- ¹⁵ 作品の中で花野に言及している文学者として佐藤の他、志賀直哉「稲村雑談」(『作品』昭和 23 (1948) 年 8 月、11 月、昭和 24 (1949) 年 3 月) や「盲亀浮木」(『新潮』昭和 38 (1963) 年 8 月)、伊藤整「ポルトガル大使館の話」(『朝日新聞』昭和 43 年 11 月 24 日)、佃実夫『わがモラエス伝』(河出書房新社、昭和 41 (1966) 年 10 月) がある。花野自身日本の文学者との関わりを述べることが少ない。

- ¹⁶ 佐藤春夫の経歴に関しては、日本近代文学館編『日本近代文学大事典』第二巻（講談社、昭和 52（1977）年 11 月）の「佐藤春夫」（吉田精一、126 頁～129 頁）等を参照。
- ¹⁷ 座談会の出席者は、佐藤や花野の他、新居格や日本文化連盟会長の松本学、徳島県学務部長湯本二郎ら全 23 名（場所は太陽軒）。
- ¹⁸ 『徳島毎日新聞』昭和 10（1935）年 6 月 28 日朝刊記事に「日本精神を海外に認識させたモ翁 お祭騒ぎの極 伝説翁とする勿れ／日本精神の訳書 第一版は早くも売切れ」という見出しで、佐藤と花野が鳴門丸で小松島に到着したことが写真付きで報じられた。
- ¹⁹ 佐藤は、法要参加に先立ち、徳島県学務部の湯本二郎の『ウェンセスラウ・デ・モラエス翁』（モラエス翁顕彰会、昭和 10（1935）年 6 月）や花野訳『日本精神』等を読んでおり、「徳島見聞記」の「モラエス小伝」はそれらの著作を参照しながら書いている。
- ²⁰ 同紙面には「モ翁追悼特輯」として、法要に参加した花野富蔵「モラエスと悟り」や新居格「再び徳島に寄せる一国際観光の角度一」なども掲載。
- ²¹ 文芸講話会は官民合同の文学団体で、昭和 9（1934）年 1 月、斉藤内閣の警保局長・松本学らと直木三十五、菊池寛、吉川英治らにより成立。物故文士の慰霊祭や文芸家遺品展覧会の開催なども行った。「戦時統制に向かう昭和 10 年前後の作家たちの営為を知るに看過できない団体」とされる（日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大事典 第四巻 事項』講談社、昭和 52（1977）年 11 月、「文芸懇話会」榎本隆司、470 頁～471 頁参照）。佐藤がモラエスの法要に参加したのも松本学の勧誘による。
- ²² 『定本 佐藤春夫全集』第 21 巻（臨川書店、平成 11（1999）年 5 月）、94 頁。
- ²³ 『定本 佐藤春夫全集』第 21 巻、前出、87 頁～88 頁。
- ²⁴ 花野「モラエスの著述」『伝記』前出、93 頁
- ²⁵ 『定本 佐藤春夫全集』第 34 巻（臨川書店、平成 13（2001）年 4 月）、363 頁。
- ²⁶ 花野訳『モラエス 日本精神』前出、282 頁～283 頁。
- ²⁷ 『定本 佐藤春夫全集』第 34 巻、前出、363 頁。
- ²⁸ 『定本 佐藤春夫全集』第 34 巻、前出、363 頁。
- ²⁹ 『定本 佐藤春夫全集』第 21 巻、前出、100 頁。
- ³⁰ 『定本 佐藤春夫全集』第 21 巻、前出、100 頁～101 頁。
- ³¹ 『定本 佐藤春夫全集』第 21 巻、前出、101 頁。
- ³² 花野訳『モラエス 徳島の盆踊』前出、344 頁～345 頁、349 頁。
- ³³ 『定本 佐藤春夫全集』第 21 巻、前出、100 頁。
- ³⁴ 『定本 佐藤春夫全集』第 21 巻、前出、101 頁。
- ³⁵ 『定本 佐藤春夫全集』第 21 巻、前出、101 頁。
- ³⁶ 『熊野路』では、佐藤の故郷・熊野の海の貝殻からモラエスが蒐集した貝殻（遺品の中にあつたもの）を想起して、「心理的詩人のものにふさはしいいい蒐集品」（『定本 佐藤春夫全集』第 21 巻、前出、169 頁）だと述べている。また「山水おぼえ帳」では、鴨長明の方丈の跡を見て、徳島のモラエスの家と比べている所がある。
- ³⁷ 『定本 佐藤春夫全集』第 21 巻、前出、335 頁。
- ³⁸ 岡村多希子「戦前におけるモラエス顕彰」前出、197 頁。
- ³⁹ 花野『日本人モラエス』（青年書房、昭和 15（1940）年 11 月）、148 頁
- ⁴⁰ 花野『日本人モラエス』前出、301 頁。
- ⁴¹ 佃実夫『わがモラエス伝』前出、21 頁。
- ⁴² 佃実夫編集『モラエス案内 モラエス生誕百年祭 記念特集（徳島文化・19 号）』（徳島県立図書館、昭和 30（1955）年 7 月）掲載の「モラエス関係「新聞記事」目録」に花野の書いた記事も挙げられているが、発表月日が不明のものもあり、未確認のものについては調査中である。